

# 地域子育て支援拠点事業の位置づけ・役割の整理と 具体的事業の現状に関する検討

— 広島市・公募型常設オープンスペース「い〜ぐる」を例として —

児嶋 芳郎・富田 道子・深澤 悦子  
杉山 直子・石橋 由美

広島都市学園大学 子ども教育学部

## 要 旨

本稿では、地域子育て支援拠点事業の位置づけとともに、その役割について整理し、とくに広島都市学園大学が運営主体となり、広島市の公募型常設オープンスペースに選定された「い〜ぐる」の具体的な運営状況から、「い〜ぐる」がオープンスペースとして検討していく必要がある課題を提起した。今後は、「い〜ぐる」独自の課題を引き続き検討するとともに、ケアセンターとしての独自の研究課題として、「子育て支援」全体の在り方についても追究していく必要がある。

**キーワード：**子育て支援、地域子育て支援拠点事業、オープンスペース

## はじめに

広島都市学園大学（以下、本学）は、2014年4月に子ども教育学部子ども教育学科を開設したのと機を一にして「こどもケアセンター」（以下、ケアセンター）を全学の附属施設として開設した。ケアセンターは新築された2号館の1階、地域住民にも容易に認識される場所に位置している。2014年度のケアセンター委員会には、本学子ども教育学科に所属する5名の教員が加わっている。今後、全学の附属施設という位置づけに応じた運営体制の整備を行っていく必要がある。

ケアセンターは、その運営方針として、第一に大学の地域貢献として子育て支援に取り組むことによって、「他者をケアし、ケアされる地域社会」をつくり（Caring Communityの創造）、「地域の人々が互いに認め合って自分らしく生きること」につなげる。第二にケアすることに関する研究（Research on Caring）、すなわち子育て・子育てに関する研究や、保育・教育研究、地域研究、高齢者研究に取り組むことを掲げている。現在ケアセンター委員会は、この運営方針を具体化するための方策をさまざまな角度から検討している途上であるが、上述の第一の視点の具体化として2014年7月1日より、広島市に選定された公募型常設オープンスペース「い〜ぐる」（以下、「い〜ぐる」）を開設した。

本稿では、地域子育て支援拠点事業の位置づけと役割を整理するとともに、ケアセンターの第一の運営方針の具体化の一つである「い〜ぐる」の運営状況等を報告し、これまでの

運営で明らかになってきた点について若干の考察を加えていく。

## 1. 地域子育て支援拠点事業とは

「い〜ぐる」は、広島市より「公募型常設オープンスペース」として選定され、運営費の補助を受けている。これは、2008年に児童福祉法に位置づけられた「地域子育て支援拠点事業」の具体化である。「い〜ぐる」の開設までの経過については後述するが、そもそも「地域子育て支援拠点事業」とは何か。ここでは、その制度的位置づけと役割について整理する。

### (1) 地域子育て支援拠点事業の制度的位置づけと目的

児童福祉法には2005年より「子育て支援事業」が規定されている。この子育て支援事業の具体的な内容の一つが「地域子育て支援拠点事業」である。

児童福祉法の第二十一条の八には、「市町村は、次条に規定する子育て支援事業に係る福祉サービスその他地域の実情に応じたきめ細かな福祉サービスが積極的に提供され、保護者が、その児童及び保護者の心身の状況、これらの者の置かれている環境その他の状況に応じて、当該児童を養育するために最も適切な支援が総合的に受けられるように、福祉サービスを提供する者又はこれに参画する者の活動の連携及び調整を図るようにすることその他の地域の実情に応じた体制の整備に努めなければならない」と、市町村が「子育て支援事業」の整備に努めなければならないことを規定している。その上で、第二十一条の九において、「市町村は、児童の健全な育成に資するため、その区域内において、放課後児童健全育成事業、子育て短期支援事業、乳児家庭全戸訪問事業、養育支援訪問事業、地域子育て支援拠点事業及び一時預かり事業並びに次に掲げる事業であつて主務省令で定めるもの（以下「子育て支援事業」という。）が着実に実施されるよう、必要な措置の実施に努めなければならない」と、「子育て支援事業」に含める具体的な事業を挙げている。

そもそも「地域子育て支援拠点事業」は、1995年に厚生省（当時）が出した通達「特別保育事業の実施について」に根拠をもち、主に保育所に併設されていた「地域子育て支援センター」と、2002年に制度化され主にNPO等の市民活動を中心として展開されていた「つどいの広場事業」、そして児童館の子育て支援機能を再編・統合する形で、2007年に制度化され、2008年に児童福祉法に位置づけられたものである。

2007年に告示された『地域子育て支援拠点事業実施要綱』では、この事業の目的を「地域の子育て支援機能の充実を図り、子育ての不安感を緩和し、子どもの健やかな育ちを促進すること」としている。また、2007年に厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室が発行した『地域子育て支援拠点事業実施のご案内』では、「少子化や核家族化の進行、地域社会の変化など、子どもや子育てをめぐる環境が大きく変化する中で、家庭や地域における子育て機能の低下や子育て中の親の孤独感や不安感の増大等といった問題が生じている」との課題意識を提示し、「地域において子育て親子の交流等を促進す

る子育て支援拠点の設置を推進することにより、地域の子育て支援機能の充実を図り、子育ての不安感等を緩和し、子どもの健やかな育ちを促進すること」を、この事業の目的としている。

## （２）地域子育て支援拠点事業の実施形態

地域子育て支援拠点事業は、実施形態によって「ひろば型」「センター型」「児童館型」の３つに分類されている。

この３つに共通する基本事業として、①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進、②子育て等に関する相談・援助の実施、③地域の子育て関連情報の提供、④子育て及び子育て支援に関する講習等がある。

前出の『地域子育て支援拠点事業実施のご案内』では、「ひろば型」の特徴として「常設のひろばを開設し、子育て家庭の親とその子ども（概ね３歳未満の児童及び保護者）…が気軽に集い、うち解けた雰囲気の中で語り合い、相互に交流を図る場を提供するもの」、 「センター型」の特徴として「地域の子育て支援情報の収集・提供に努め、子育て全般に関する専門的な支援を行う拠点として機能するとともに、既存のネットワークや子育て支援活動を行う団体等と連携しながら、地域に出向いた地域支援活動を展開するもの」、 「児童館型」の特徴として「民営の児童館、児童センターにおいて、学齢期の子どもが来館する前の時間等を利用して、親と子の交流、つどいの場を設置するとともに、子育て中の親などの当事者等をスタッフとして参加させた身近で利用しやすい地域交流活動を展開するもの」と述べている。

このような形で進められてきた「地域子育て支援拠点事業」であるが、厚生労働省は2013年に本事業の「開始から５年が経過し、実施形態の多様化」が起り、さらに2012年８月に成立した「子ども・子育て支援法」において、「子育て家庭が子育て支援の給付・事業の中から適切な選択が出来るよう、地域の身近な立場から情報の集約・提供を行う『利用者支援』が法定化」されたことを踏まえて、2013年度より本事業の拡充を図るために下記の２点を示した。

一つ目は、３形態の再編についてである。従来の「ひろば型」と「センター型」を「一般型」に再編し、職員配置や活動内容に応じた支援の仕組みとするとともに、「児童館型」は「連携型」として実施対象施設を見直す。

二つ目は、「利用者支援」「地域支援」を行う「地域機能強化型」の創設である。「地域機能強化型」は、上述の基本事業に加え、「子育て家庭が子育て支援の給付・事業の中から適切な選択ができるよう、地域の身近な立場から情報の集約・提供を行う『利用者支援』とともに、親子の育ちを支援する世代間交流や訪問支援、地域ボランティアとの協働などを行う『地域支援』を実施」とされている。厚生労働省の構想では、都市部を中心に約1,100カ所の設置をめざしている。

### (3) 地域子育て支援拠点事業の現状

厚生労働省によると、2012年度に「子育て支援交付金」の交付決定がされている「地域子育て支援拠点事業」は、全国で5,968カ所となっている。内訳を見ると、「ひろば型」が2,266カ所（3～4日開所：797カ所，5日開所：986カ所，6～7日開所：425カ所，出張ひろば：58カ所），「センター型」が3,302カ所，「児童館型」が400カ所となっている。

2010年1月に閣議決定された「子ども・子育てビジョン」では、2014年度に1万カ所の設置がめざされているが、この数字の達成は容易ではない。また、上述の機能拡充についても具体化が行われていない状況である。

## 2. 広島市の「地域子育て支援拠点事業」の現状

ここでは本学が位置する広島市の「地域子育て支援拠点事業」の現状について述べる。

### (1) 常設型のオープンスペース

広島市は、原則として週5日以上開催している「常設型のオープンスペース」を運営している。広島市内の8つのすべての区に1つずつ設置されており、それぞれ「つどいの広場『げんキッズ』」（中区）、「ぽっぴがし」（東区）、「キッズひろば みなみ」（南区）、「にしくニコニコひろば」（西区）、「オアシスあさみなみ」（安佐南区）、「スマイルあさきた」（安佐北区）、「あおぞら安芸っ子」（安芸区）、「おやこっこさえき」（佐伯区）となっている。地域福祉センターや区役所等で開催されている。

### (2) 公募型常設オープンスペース

広島市は「地域子育て支援拠点事業」として「公募型常設オープンスペース」を選定し、補助金を交付している。この事業の目的は「子育て家庭の親とその子ども（概ね3歳未満の乳幼児及び保護者。以下「子育て親子」という。）がいつでも気軽に集い、相互交流を図るとともに子育ての相談が受けられる場（以下「公募型常設オープンスペース」という。）を開設運営することにより、子育て家庭の孤立化を防止し、保護者の子育てに対する不安や負担感の軽減及び地域における子育て力の向上を図ること」である。

また、その事業内容は「ア 子育て親子の交流の場の提供と交流の促進（通年）」「イ 子育てに関する相談、助言の実施（通年）」「ウ 地域の子育てに関する情報提供（通年）」「エ 子育て及び子育て支援に関する講習会等の実施（月1回以上）」と規定し、このすべての内容を実施する必要があるとしている。

現在、広島市には「い〜ぐる」を含め4つの「公募型常設オープンスペース」がある。「い〜ぐる」以外を列举すると、2012年10月1日開設の「ひろば KUSU-KUSU」（安佐南区、運営：特定非営利活動法人e子育てセンター）、「すずらんひろば高陽」（安佐北区、運営：学校法人 武田学園（広島文教女子大学））、2013年7月2日開設の「子育てひろば『ころろ』」（西区、運営：特定非営利活動法人子どもコミュニティネットひろしま）である。

厚生労働省によれば、政令指定都市の地域子育て支援拠点事業の実施箇所数は表のようになっている。単純な比較はできないが、設置数及び人口比で広島市は最も少ない状況にあり、今後の整備が必要であると考えられる。

### (3) その他のオープンスペース

広島市からの補助を受けずに開催されているオープンスペースもある。広島市のホームページに各区の状況が示されているので参照されたい。

各オープンスペースは月1回程度の開催で、子育てサークルなどが自主的に行っているものが多い。

表 政令指定都市の地域子育て支援拠点事業の実施箇所数

	人口	ひろば型	センター型	児童館型	合計	一カ所当たり人数
広島市	1,172,498	3	7	0	10	117,250
札幌市	1,942,648	21	10	19	50	38,853
仙台市	1,073,242	4	26	0	30	35,775
さいたま市	1,259,858	45	11	0	56	22,497
千葉市	965,679	11	8	0	19	50,825
横浜市	3,710,008	41	47	0	88	42,159
川崎市	1,461,043	0	25	26	51	28,648
相模原市	722,737	2	10	0	12	60,228
新潟市	804,561	0	41	0	41	19,623
静岡市	706,553	2	15	1	18	39,253
浜松市	810,642	37	0	0	37	21,909
名古屋市	2,276,590	20	49	16	85	26,783
京都市	1,469,253	29	17	130	176	8,348
大阪市	2,686,246	68	35	0	103	26,080
堺市	840,056	21	8	0	29	28,967
神戸市	1,537,864	7	12	115	134	11,477
岡山市	703,443	11	11	0	22	31,975
北九州市	963,259	7	8	0	15	64,217
福岡市	1,519,349	14	0	0	14	108,525
熊本市	740,139	2	20	0	22	33,643

## 3. 「い〜ぐる」設立の経過と現状

「い〜ぐる」は、広島市から「公募型常設オープンスペース」として、4カ所目の選定を受け、2014年7月1日に開設した。ここではその設立の経過及び現状を紹介する。

### (1) 広島市からの選定及び開設までの経過

広島市は南区内で翠町中学校区を除く地区において「公募型常設オープンスペース」の設置・運営を行う団体の募集を2014年4月15日から開始した。ケアセンター委員会では、

2014年4月18日の会議においてこれに応募することを決定し、応募書類の作成を始めた。同年5月16日に応募書類を提出し、広島市の担当者による現地視察を同22日に受けた。そして、同30日に広島市より結果が発表され、設置・運営団体として選定されることとなった。

選定決定後は、「地域子育て支援拠点事業補助金交付申請書」の作成を進めるとともに、6月5日には上述の「すずらんひろば高陽」を視察し（ケアセンター委員4人参加）、オープンスペースの環境設定、運営上の留意点などについて説明を受けた。同時期に、オープンスペースの名称を「い〜ぐる」とすることも決定した。同25日には地域住民に対して「こどもケアセンター」の施設見学会及びオープンスペース体験会を実施し、同27日には運営上の課題を探ることを目的に、実際に子育て親子に入室してもらうプレオープンを行った。このような経過をたどり、7月1日に開設の運びとなった。

## **（2）「い〜ぐる」がめざすもの**

「い〜ぐる」は、どのような目標をもって「公募型常設オープンスペース」を設置・運営しているのか。広島市が事業内容として示している上述の4つの内容について、設置・運営団体として応募した際に提出し、運営上の基本的視点として確認しているものを見てみる。

### **1) 子育て親子の交流の場の提供と交流の促進**

子育て親子が安全に安心して、いつでも気軽に足を運ぶことができる場とすることを第一に、施設・備品を充実させる。具体的には、複数の親子がともに遊ぶことのできる大型遊具などを用意する。また、絵本などについては、選定のポイントを積極的に母親たちに伝えていくことも大切にしたい。

その上で、保育士資格を有する常駐スタッフが、子育て親子間の交流を促すために、積極的にしかも自然な形で声かけをする、共通して関心があると考えられる子育てに関する話題を提供するなどの働きかけを行っていく。子ども同士で遊ぶ様子や、常駐するスタッフと子どもがかかわる姿を見つつ、保護者同士が互いに交流し、学び合える場面を意図的につくりだしていく。あわせて、子ども同士が互いに他児を意識し、かかわり合って遊ぶことができる機会を積極的につくっていく。

常駐スタッフの配置については、子育て親子が安心できるよう、曜日毎に固定化する。また、広島都市学園大学子ども教育学部の教員も、定期的に本施設に足を運び、各子育て親子との交流をもつとともに、子育て親子間の交流を促進する働きかけを積極的に行う。

子ども同士の自発的な遊びやかかわりを大切にするとともに、子育て親子間の交流の促進や、初めて本施設を利用する子育て親子が躊躇することなく集団に入っていけるように、絵本の読み聞かせや親子・集団で取り組める遊び紹介の時間を設定する。加えて、保護者同士が協力して活動する機会を意図的に設定し、交流の促進を図る。

## 2) 子育てに関する相談、助言の実施

子育てに関する悩みを一人で抱え込まないことが大切である。まずは、どんな些細な悩みでも「ここなら相談できる、出してもいい」という雰囲気醸成していきたい。そのために、常駐するスタッフは母親が声をかけやすいような配慮を常に行っていく。また、週に1回程度、子育て親子が悩みを出し合い、共有し、ともに考え合っていく場として、「何でも相談の時間」を設定したい。この「時間」には、常駐スタッフだけではなく、広島都市学園大学子ども教育学部の教員も参加し、相談・助言を行う。

常設オープンスペースを利用する子育て親子の具体的な姿から導き出される子育て上の課題について、適宜保護者に助言するほか、望ましい子どもの発達の姿や遊びなどについても積極的に助言していく。

助言に際しては、性急に答えを求めるのではなく、子育て親子の家庭での養育力を促進する観点から、悩みの軽減・解決の方策をともに考える中で、最終的には本人の自己決定を尊重しながら自己解決することができる力、親が子どもを育てる力、親同士が相互に支え合える力を引き出す方向で行っていく。

現代的な課題である、いわゆる「ママ友」同士の悩みや関係性の在り方に対しても相談・助言を行うとともに、子育ての在り方をともに考え合え、支え合える関係へと導くように助言する。

子育て親子が、悩みを出しやすい場とするために、常駐スタッフは曜日毎に固定化する。

また、深刻な悩み（子どもの発達障害に関することや虐待、DVなど）については、個別対応の時間をとり（オープンスペースとは別の時間、場所を設定し）、プライバシーの保護に十分に配慮しながら、常駐スタッフを含め、広島都市学園大学子ども教育学部、同健康科学部看護学科・リハビリテーション学科の教員が相談を受け付け、助言を行っている。

## 3) 地域の子育てに関する情報提供

子育ては、日常的には各家庭がその役割を担うことになる。しかし、子育ては社会的な営みであり、地域社会が共同・分担して関わっていくことが必要である。また、現代はインターネットを含むメディア上にさまざまな子育てに関する情報があふれているが、そこから何が正しく、何を選択すればいいのか判断することは、たいへん難しいことである。

本施設では、地域の子育て機関や地域住民と連携しつつ、地域に密着した子育て情報を、「子育て通信」といった形で、定期的に無料で配布していくことを考えている。あわせて、子育て情報をどう選択していくのか、そのポイントなどについても発信していく（子育て情報に対するメディアリテラシーの育成）。

本施設では、場所、開設日、開設時間、事業内容を示したホームページやSNSを活用して、広く地域の子育て親子に周知を図る。それとともにパンフレット等を作成し、地域住民へ積極的に広報活動を行う。

本施設で蓄積した知見は冊子等を作成することで、地域住民のみならず、広く共有化で

きる形にしていく。また、地域の状況のみならず、広島県内の他市や近県、全国的な子育てに関する情報も積極的に提供していく。

#### 4) 子育て及び子育て支援に関する講習会等の実施

講習会等の実施に当たっては、子育て親子への的確・正確な情報提供ということを第一に大切にす。また、父親の子育てへの参画を促進することや、地域の子育て力を向上させるという観点も大事にしたい。あわせて、実際に役立つもの、現代の子育ての課題ということも視野に入りたい。

上記のようなことを実現させるために、月1回以上の講習会等を継続的に企画・運営していく。具体的なテーマとしては、「現代の子育て事情」「子育て情報の収集と活用方法」「父親と子育て」「祖父母の子育て支援」「地域の子育て力の向上とその果たすべき役割」「子どもの心身の発達」「子どもと遊び」「食と子育て」「子どもを取り巻く環境の現状」「絵本の読み聞かせ方入門」「発達障害とは?」「虐待と子育て」等を考えている。テーマ選定に関しては、本施設に足を運ぶ子育て親子や地域住民からの要望を十分に受け止めて設定し、回数を増やすことも柔軟に考える。

講習会等の講師としては、広島都市学園大学子ども教育学部及び同健康科学部看護学科・リハビリテーション学科の教員だけではなく、地域の子育て機関の関係者、企業、地域の人材等、地域の社会資源を積極的に活用することを想定している。講習会等の実施において、講師を確保することが容易であること、多彩なテーマを設定することが可能であることも、本施設の大きな特徴である。

講習会等の実施の際には、参加者にアンケートへの協力を要請する。その結果を参考に、講習内容の改善やテーマ設定を行うとともに、子育て親子の保護者と子どものニーズを把握する。また、本施設に対して出された要望を踏まえて、運営の点検・改善を行っていく。

#### 5) 「い〜ぐる」のねがい

「い〜ぐる」では子育て親子に対して以下の5つの「ねがい」を提示している。それは、①子育ては、ゆったり、②気軽に相談できる、“いいグループ”、③食べて健康、“いいグルメ”、④“い〜ぐる”で、ゆったり、⑤みんなでつくりたい、地域のつながり、である。

この「ねがい」は、上述の事業内容における目標を端的に示したものであり、この実現が「地域子育て支援拠点事業」の目的を達成することに通じるものであると考えている。

#### (3) 「い〜ぐる」の運営状況

上述のような目標をもち「い〜ぐる」は2014年7月1日より運営を開始した。日常の運営においては5人の子育てアドバイザーがあたっている。この5人は、それぞれが広島市の公立保育所で長年実践を積み重ね、また管理職として保育所の運営を担ってきた経験を有している。

「い〜ぐる」は、月〜金曜日の午前10時から午後3時に開所している。上述の5人の子育てアドバイザーがローテーションを組み、常時2人以上が在室している。広島市の規定



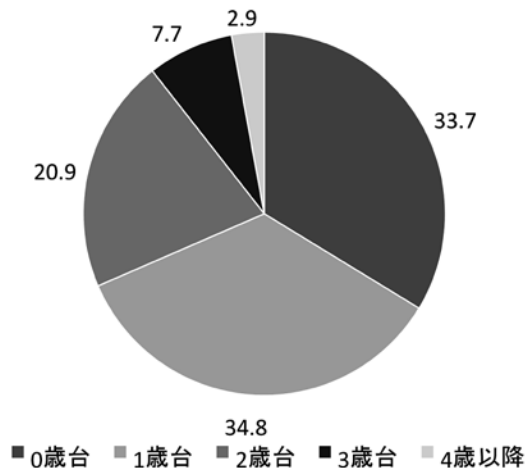


図 「い〜ぐる」を利用した子どもの年齢構成

では常時2人以上の子育てアドバイザーを配置し、その内1人が保育士資格を有する者としているが、それを越える人員配置となっている。

7月1日に開所以来、9月30日までの3ヵ月間（開設日：55日）で利用した子育て親子は196組、述べ人数では1,662人（その内子どもは870人）である。870人の子どもの年齢構成を見ると、最も多いのが1歳台で34.8%、次いで0歳台の33.7%、2歳台の20.9%となっている（主な対象は3歳以下の子どもである）（図）。

利用した子育て親子の居住地域を見ると、「い〜ぐる」が位置する南区が1,338人（1,662人中の80.5%）、中区が214人（同じく12.9%）と、両区だけで9割を超えている。

また、子育てに関する相談件数は13件であり、この期間中には個別に時間を設定しての相談はなく、すべて通常の開設時間内（「何でも相談の時間」を含め）に対応したものである。

#### （４）利用者の子育て上の「悩み」

「い〜ぐる」では、初めて利用する子育て親子に対して、アンケート調査への協力を依頼している。このアンケートは、「い〜ぐる」を利用する子育て親子が毎日をどのように送り、またどのような心配や悩みを抱えているのかを把握することで、今後の運営への示唆を得る目的をもっている。アンケートには119組の子育て親子が回答してくれている。

アンケート調査の詳細な結果報告は他稿に譲るが、ここでは「い〜ぐる」を利用している保護者の「気がかり・心配ごと」に関して報告する。

アンケート調査では、子どもに対して「気がかり・心配ごと」があるかどうかを、「①からだの成長（身体・体重など）、②運動機能の発達、③食事（離乳食・幼児食）、④その他（自由記述欄あり）、⑤特になし」の5つの選択肢を設けて問うている（複数回答可）。

この項目に対してはアンケートに答えた119組すべてが回答を寄せている。上記①～③の回答については別稿に譲り、ここでは「その他」と回答した者（17人、14.2%）の、自由記述の内容について見ていく。

自由記述はその内容に応じて10項目に分類した。それを列挙すると「トイレトレーニング」「人との関わり」「拒否（イヤイヤ）への対応」「指しゃぶり」「きょうだい関係」「しつけ」「卒乳」「かんしゃく」「言葉の発達」「子育て、教育、子どもの育ち」である。

内容を見ると、たとえば「イヤイヤへの対応」「指しゃぶりがとれない」「叱るときの叱り方」「卒乳のタイミング」など、いうなれば子育ての「方法」に関する悩みという点で共通点を見出すことができる。

#### 4. オープンスペースの役割に対する考察

ここでは、広島市が公募型常設オープンスペースの事業内容として示している「ア 子育て親子の交流の場の提供と交流の促進（通年）」「イ 子育てに関する相談、助言の実施（通年）」「ウ 地域の子育てに関する情報提供（通年）」「エ 子育て及び子育て支援に関する講習会等の実施（月1回以上）」という4点を視点とし、「い〜ぐる」の現状より、オープンスペースの役割に対して若干の考察を加える。

##### （1）交流の場の提供と交流の促進

オープンスペースの役割として、子育て親子が安心・安全に過ごすことができる交流の場の提供は前提となる。

「い〜ぐる」は運営母体が大学であり、位置的にも大学の校舎内に設置されている。このことは「安全で安心して行くことができる」という信頼感のようなものを子育て親子に与える上で、大きな要因となるであろう。あわせて、「い〜ぐる」に常駐している子育てアドバイザーの存在も、「安心・安全」をつくり出す上で大きな役割を担っている。子育てアドバイザーは全員経験豊富な保育士であり、かつ各々が管理職として保育所の保育環境整備等に関する経験を有している。若干例を挙げると、子どもたちの不測のケガを防ぐためにテーブルや荷物の収納などの突起をなくす、ドアに指をつめないためにカギをつけるなどの細部の改善から、子どもの導線を考えた室内の机などの配置といった全体的なものまで、具体的なアドバイス・改善を行っている。

交流の促進という面でも、子育てアドバイザーは大きな役割を担っている。それは「交流を促す言葉がけを〇〇回／時間行った」などのように客観的指標で表れるものではないが、大きな意味をもっているものである。直接的には、個別ですごしている親子の姿が目につく時には、そこに子育てアドバイザーが入っていき、個々との対話を進めながら、多くの子育て親子に共通するような話題を抽出する。それを子育てアドバイザーが仲介するような形で複数の保護者が話し合う「渦」をつくり出すというようなものである。また、間接的なものとしては、「い〜ぐる」内に子どもが興味関心を示すような、四季や様々な

行事を感じられる環境整備を行い、子ども同士の関わりをつくり出すようにし、それを端緒として保護者同士の関わりをつくるというようなものである。

オープンスペースでは前提として、子育てアドバイザーが直接的に子どもの指導・支援にあたるのではなく、子育て親子の「子育て力」を引き出し・高めていく役割を担うということがある。上述のような「い〜ぐる」で子育てアドバイザーが担っている役割は、まさにこのことを具現化しており、あわせて「い〜ぐる」の願いである「気軽に相談できる、“いいグループ”」をつくり出すことに寄与するであろう。

「い〜ぐる」で実施したアンケート調査からは、利用する子育て親子の多くが、すでに他の「子育てサークル」に所属し、何らかの子育て親子同士の交流の場をもっていることが示されている。一定程度「密な関係」をもちつつオープンスペースも利用しているのである。それでは、いわば「ゆるやかな関係」であるオープンスペースの利用者同士がつくり出す交流とはどういったものであるか。加えて、「密な関係」をもっていない、もちたいたいという思いがありながらもていないという子育て親子に対してどう交流の場をつくり出すのか。また、それはどのようなものに発展させていくのか（たとえば、オープンスペースが「子育てサークル」を主催するのか、自主的な「子育てサークル」の結成をうながすのかなど）。ここで列挙したような点について、今後の「こどもケアセンター」自体の運営の方向性も交え検討する必要がある。

## （２）子育てに関する相談、助言の実施

「子育てに関する相談、助言」は、相談を受けるだけではなく、その相談に対してどう的確な助言を行うことができるかという、双方向性をもったやりとりの総体を視野に入れなければならない。それは「カウンセリング」といわれるものにも通じるものであると考えられる。しかし、オープンスペースは、そのような濃密な相談者と援助者の関係を形成する場とは性格が異なる。

本来であれば、「子育てに関する相談、援助」を論じる場合には、その相談内容をどう受け止め、どう援助をしていくのかという、具体的な方法論に踏み込んだ議論が必要であろうが、それは今後の課題としつつ、ここでは「相談」に焦点をあて、しかも「相談を受ける環境をどう形成するか」に特化して考察を加える。

オープンスペースにおける「相談」は、それと意識化したものだけではなく、上述の「交流の場の提供、交流の促進」に関わる活動中でも、無意識のうちにやっていることであろう。上述のように、「い〜ぐる」における相談件数（７～９月）は13件である。相談内容としては、日常的な子育ての方法、子どもの成長・発達についてがほとんどで、児童虐待などに関連するいわゆる「深刻な悩み」といったものはこれまでにない。その現れとして、この期間中には個別に時間を設定しての相談はない。これは、「い〜ぐる」が子育て親子が「気軽に遊びに来る」オープンスペースであり相談機関ではないという位置づけにおいては、当然の結果であろう。

「い〜ぐる」は平日の午前10時〜午後3時の開所であり、当然のことこの時間内に来所が可能である子育て親子のみが利用者である。しかも、母子での利用がほとんどである。加えて毎回一家族100円の利用料も必要である。このような条件のもと、「い〜ぐる」を利用できるということは、産前後休業・育児休業中であることも含むが、多くがいわゆる専業主婦あるいは上述の休業を取ることができる生活環境にある子育て親子であり、いくなれば日常生活で逼迫を感じていない層であろう。また、上述のようにすでにいくつかの「密な関係」も持ち得ている層である。

しかし、利用者がこのような層であり、その帰結として子育てに関する相談が少なくなるとはいえ、利用者の中に相談をしたい者がいないわけではない。表面上はわからないかもしれないが、日常の子育てに悩みを抱え、重い一歩を踏み出した子育て親子もいるであろうし、子どもの成長・発達の姿に疑問を感じ、それを他の子どもの姿と比較することで確認しようとしている親子もいるであろう。そういった子育て親子の悩みをどうくみ取り、助言を行っていくのかの検討が必要である。また、現状では「深刻」ではない悩みであった場合にも、以後の生活環境によって「深刻」なものになっていくことは多々ある。「深刻」化する前に、どう関わり、助言を行っていくかについても検討を要する。

一方、ここで述べるまでもなく、生活の困窮（金銭面だけではなく、広義の意味を含めて）は、子育てに対して様々な負の影響を与えることが明らかにされている。そういった状況にある子育て親子は、オープンスペースのような場を利用すること自体が困難である。また、「深刻な悩み」を抱えている子育て親子は、相談の場に一歩を踏み出すことに躊躇したり、その気力すらもてないこともあろう。本来的には、そういった子育て親子にこそ、相談・援助が必要であると考えられるが、オープンスペースという場の性格上限界がある。このことについては、ケアセンターが掲げる『『他者をケアし、ケアされる地域社会』をつくり（Caring Communityの創造）』という理念に照らし、別の角度からのアプローチ方法を検討していかなければならないであろう。

今後は、地域に潜在化する「子育てに関する相談」へのニーズをどうすれば掘り起こすことができるかを検討することが必要である。あわせて、ここでは取り上げなかった「助言」についても検討をしなければならない。

### **（3）地域の子育てに関する情報提供**

これまでの「い〜ぐる」では、まだこの「地域の子育てに関する情報提供」に対しては十分に取り組みを行えていない。「保育所や幼稚園」「医療機関」「公共施設」に関して、子育てアドバイザー各人が有する情報を、来所する子育て親子に個別に提供しているのが現状である。ここでは、今後検討を要するポイントについて指摘することに留めたい。

1点目は、「地域」をどう考えるかである。「い〜ぐる」は、広島市の選定を受けた公募型常設オープンスペースである。上述のように多くの利用者が「い〜ぐる」が位置する南区に在住している。広島市でも南区内に在住の子育て親子を利用者の中心として想定して

いることが推察されるが、南区だけでも広域であり、「地域」と言った場合にひとつに集約することが困難である。まずは、子育てにおける「地域」とはどういったものであり、その「地域」における社会資源のひとつとして、どういった役割を担う必要があるのか、また現実問題として担い得るのかを検討する必要がある。

2点目は、子育て親子が求める「情報」とはどんなものである。ただ単に、保育所や医療機関、公共機関などハード面に関するものなのか、それともソフト面に及ぶものなのか。当然、そこには明瞭な線引きはできないであろうが、子育て親子のニーズを的確に把握する努力が求められるであろう。

3点目は、上述のような情報をどのような形で提供すればいいのかである。「い〜ぐる」では、現状において「通信」のような紙媒体とネット上のSNSによって情報を提供しているが、それは「子育てに関する情報」を必要としている子育て親子に、情報を伝える適切な方法なのか。母親が乳児の顔を見ず、スマートフォンなどを操作しながら授乳を行っている状況などが報道されることがある。その是非はここでは問わないが、様々な情報があふれ、それに振り回されるようなことが増えている現状において、情報提供の方法を検討する必要がある。また、子育て親子が情報の受取手という存在であるのではなく、情報を発信する主体となることも必要であろう。情報の双方向性という側面も検討が必要である。

#### **(4) 子育て及び子育て支援に関する講習会等の実施**

「い〜ぐる」では、7月に「七夕コンサート」(交流会)、8月に遊びに関する講演会、9月に“食”に関する講習会を開催した。今後も上述のような講習会等を計画している。

この講習会等は、ただ単に利用者を集めるための企画ではなく、オープンスペースの事業内容である「交流の場の提供と交流の促進」「子育てに関する相談、助言」「地域の子育てに関する情報提供」という側面を含み込んだものであるととらえることができる。

たとえば、「交流会」は日常ではオープンスペース内に収斂される「交流」を、地域住民との「交流」へと広げ、あわせてテーマをひとつに絞ることで、それぞれが明確な意図を共有しながら「交流」するために、それが促進されるであろう。また講演会や講習会は、子育て親子に対して「助言」したり、提供したい「情報」を、「い〜ぐる」が明確にもって企画できる。しかも、そこへの参加者は自らが希望して参加しており、「助言」「情報」を「押しつけ」と受け止めないであろう。このように、講習会等は複合的な面がある。

では、これを発展させていくためには何が必要なのか。一つは、地域での「交流」を、地域の「子育て力」の向上にどうつなげていくのか、そこでオープンスペースがどういった役割を担うのかについて検討していくことである。幸いにして、「い〜ぐる」は大学が運営主体となっている。現在は大学における地域貢献が強く意識されており、本学も重点を置いている。地域の教育資源として地域住民に認識される面もある。今後は、地域住民の認識を広げることで、より多くの地域住民との「交流」をめざすとともに、大学とオープンスペースの役割を明確にしつつ連携して、「子育て力」の向上を行っていく必要がある。

ろう。またそこでは、「子育て力」とは何かという根本的な点を追究していく必要もある。この部分については、ケアセンター自体の研究テーマとリンクするが、「情報」の精選が必要となっていく。

## おわりに

本稿では、地域子育て支援拠点事業の位置づけとともに、その役割について整理し、とくに本学が運営主体となり、広島市の公募型常設オープンスペースに選定された「い〜ぐる」の具体的な運営状況から、今後「い〜ぐる」がオープンスペースとして検討していく必要がある課題を提起した。

しかし、本稿は「い〜ぐる」開設から3ヵ月の時点でのものであり、あくまでも途中経過の報告である。しかも、具体的な運営状況を背景としたものであるために、それが他のオープンスペースにも共通するものか、またひいては地域子育て支援事業に対しても言及できるものかという検討は不十分である。

今後は、「い〜ぐる」独自の課題を引き続き検討するとともに、ケアセンターとしての独自の研究課題として、「子育て支援」全体の在り方についても追究していく必要がある。

## 文献

- 厚生労働省（2012）平成24年度 地域子育て支援拠点事業実施箇所数（子育て支援交付金交付決定ベース）  
（<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/24jokyo.pdf> 2014年10月10日閲覧）
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室（2007）地域子育て支援事業実施のご案内  
（<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/gaido.pdf> 2014年10月10日閲覧）